



第41回 寒地技術シンポジウム

第41回寒地技術シンポジウムを札幌市（会場：札幌コンベンションセンター）で開催いたします。寒地技術に関心を持つ多くの皆さまのお申込み、ご参加をお待ちしております。
詳しくはdecサイト内ホームページ（<http://www.decnet.or.jp/project/ctc/>）をご覧ください。



「寒地技術シンポジウム」ウェブサイト

■開催日：2025年11月19日(水)・20日(木)

■会 場：札幌コンベンションセンター
（札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1）

■内 容：

- ★聴講〈無料〉……………【申込締切】 11月6日(木)
- ★報告論文→申込・概要提出……………【申込締切】 8月28日(木)
- 報告論文原稿提出……………【締 切】 10月10日(金)
- ★ポスター(ポスター発表)
申込・概要提出……………【申込締切】 8月28日(木)
- ★技術展示
申込・技術資料提出……………【申込締切】 8月28日(木)
- ★発表概要集(1冊2,000円〔予価〕)※当日資料代としてお支払いください
- ★懇親会…11月19日(水)開催予定(有料)

プログラムは10月下旬
ご案内の予定です



北海道のよりみちドライブ情報 「Scenic Byway vol.35 夏秋号」

本号の特集テーマは、「ドライブ & 実り」。海からも山からも爽やかな風を感じて走る北海道の「夏」のドライブ。グッと気温が下がった日の後に、大地が一気に彩られる「秋」のドライブ。本号は、夏の始まりから秋の訪れまでの季節を楽しむ北海道の旅を“実り”をテーマに、ご紹介します。
「Scenic Byway vol.35 夏秋号」は、全道の道の駅等で配布中です。ぜひ手に取ってご覧ください。



「シーニックドライブマップ 2025年度版」発売中! 定価250円(税込)

今回の特集は、「北海道ならではの絶景を再発見!【道の魅力再発見】」。その他、地域イチオシの食などを楽しむ「ホクホクな道の駅」、地元ならではの「シーニックなカフェ」を紹介します。北海道内全「道の駅」「ファイターズコラボ道の駅」を網羅した全道道の駅マップ付です。恒例の“北海道「道の駅」スタンプラリー2025”と併せて楽しめるWチャンス応募券付きです。

🏠 **「道の駅」マップ付き! 全道の道の駅で購入できます!**



編集後記

先日、ほっかいどう学インフラツアーズで寒地土木研究所を訪れました。まずは座学で研究所の歴史や研究内容などを勉強。さらに無電柱化による街の景観改善について町の模型を使い、ブラレールにカメラを搭載した車両を走らせ、モニターを見ながら電柱の位置を変えることでどのように景観が変化するかを観察しました(写真左)。その他にも様々な研究施設を見学し、豊平川を模した水が流れる模型での実験(写真右)なども見ることができ、とても充実したツアーとなりました(R.W)

dec monthly vol.479

2025年8月1日発行

発行人 橋本 幸
編集人

発行所

一般社団法人 北海道開発技術センター 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL (011) 738-3361 FAX (011) 738-1886 URL <http://www.decnet.or.jp/> E-mail dec_info01@decnet.or.jp



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2025.8.1 vol.479 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンスリートピック)

シーニックバイウェイ北海道 20周年記念フォーラム
～ Create a “Scenic Byway Culture” ～

dec Interview >>> 岩田地崎建設株式会社 代表取締役社長、北海道商工会議所連合会 会頭、シーニックバイウェイ北海道推進協議会 会長 岩田 圭剛 氏

シーニックバイウェイ北海道推進協議会は、民間と行政が一体となってシーニックバイウェイ北海道の全道規模の展開をリードする組織。2016年から会長としてその旗頭となってこれたのが岩田圭剛さんです。道内最大手ゼネコン岩田地崎建設株式会社のトップとしての感懐を含め、さまざまなお話をうかがうことができました。

ご祖父の岩田徳治氏が札幌村苗穂の地に「岩田組」を創業したのが1922(大正11)年。98年に5代目社長としてバトンを引き継ぎ、3年前、御社は創業100周年を迎えられました。

私自身、生まれも育ちも札幌市東区の苗穂です。1890(明治23)年に私の曾祖父が富山県から集団入植でこの地に入り農業を営みました。徳治はその末っ子で、唯一札幌に移ってから生まれた道産子です。だから、祖父の徳治、父の巖、私は純粋道産子3代なのですね。

徳治は20歳ごろに姉の嫁ぎ先の「村上組」という土木建築請負会社に入って働き始め、7年ほど経ったころ、事務所の一角を借りて、机一つ、自転車1台で「岩田組」の看板を挙げて独立します。それが現在、本社ビルが建つ苗穂の地でした。

地域のために尽力し、一代で道内有数の建設会社を築き上げた徳治の活躍や功績は語り草になっていますが、出世話として特に有名なのは札幌一条大橋の架け替え工事でしょう。老朽化した橋



札幌一条大橋(昭和14年12月竣工)

を北海道初の鉄筋コンクリートで近代化しようという札幌市の計画でしたが、予算は少なく、どこかの業者も採算が合わないと及び腰でした。徳治は損を覚悟で引き受け、最新の機械を導入するなど工夫を重ねて1939(昭和14)年無事完成させました。しかも儲けが出たので、それを地域に還元しようと盛大な渡り初め式をして、地元の人たちを大いに喜ばせたということです。

以来、祖父・徳治、父・巖(1960年社長就任、86年逝去)の時代を通じて、弊社は豊平川にかかる橋を中心に道内主要河川の橋を多く手掛け、「橋の岩田」と呼ばれてきました。この本社ビルからよく見える「平和大橋」も弊社施工で2004年に開通した橋。橋の開通記念式典では、よく地元出身者の「親子三代渡り初め」が行われますが、それをぜひ父と実現したかった。しかし、残念ながらありませんでした。

では、社長に就任される前のご自身の歩みについてお聞かせください。

分野や所属を超え、同じ目標に向かって取り組む人たちの前向きで和気あいあいの雰囲気素晴らしい。シーニックバイウェイ北海道はまさに先端的な地域づくりだと思います。

dec Interview

いわた けいごう

1953年札幌市生まれ。77年青山学院大学経営学部卒業。大木建設(株)(東京)を経て、80年岩田建設(株)取締役、98年に第5代社長に就任。2004年(株)ICホールディングスを設立し、地崎工業グループと経営統合。07年(株)地崎工業を吸収合併し、岩田地崎建設(株)を設立。同社代表取締役社長に。09年(一社)北海道建設業協会会長、16年北海道商工会議所連合会会頭、シーニックバイウェイ北海道推進協議会会長に就任。趣味はゴルフ。音楽も好きでGSバンドの活動経験も。

青山学院大学を卒業後、3年ほど大木建設(株)の東京本社に勤務しました。同社は当時、東証2部上場の大手ゼネコンの一つでしたが、1970年代の昔のことですから職場ではいろいろと面白い体験をしましたね。

例えば、東北発祥の会社なので、社員に東北出身者が多く、なぜか九州出身者も多かった。そういう社員たちはいずれもお国なまりが強く、私には何を言っているかわからない。意思疎通に難儀しました(笑)。

また、同社では現場の事務や経理などを勉強させてもらったのですが、当時はまだそろばんの時代。経理部の職員はみなそろばんが堪能で、得意でない私は一人、電卓で仕事をしていました。困ったことに、そろばんで仕事をしている人は電話が鳴っても手元を止められないので、受話器を取らない。そこで私が電話を取りまくることになる(笑)。経理担当の人たちは、それでも無口な人が多く、職場では私だけが賑やかにやっている感じでした。



社長就任当時の様子

80年に札幌に戻って、父・巖が2代目社長を務める岩田建設(株)に入社し、総務部長を振り出しに働き始めました。86年に父はがんで亡くなり、叔父の岩田基義が2年ほど社長を務めた後、父の強い希望で眞田眞氏を4代目社長に迎えました。素晴らしい方で9年ほどの在任期間に会社を大きくしていただいた。その後98年に私が5代目社長に就きました。まだ40代半ばでしたから、本当に長い間、社長をやってきましたね。

30年近くの社長のご経験のなかで最も思い出に残ることは何でしょうか。

それはやはり、(株)地崎工業との合併ですね。2000年代初めごろは建設市場の縮小や構造変化などで建設業界は

非常に厳しい状況に置かれていました。国交省も建設関連企業に対して介護や農業など新分野への展開を盛んに推奨していた時期です。しかし、弊社の場合は建設業以外に手を広げるのではなく、これまで蓄積したものを横展開か、縦展開するしか生き抜く道はないと考えていました。

そんなところに銀行から持ち込まれたのが業績不振で債務超過に陥った(株)地崎工業との経営統合でした。難しい決断でしたが、2004年に持ち株会社「ICホールディングス」を設立。双方、100%子会社で傘下に入るかたちで再建を図りました。しかし、業績は好転せず、吸収合併した方が良いと判断して07年、「岩田地崎建設株式会社」となりました。

合併への準備は極秘で進めなければならず、ハードでした。社内では最初は4人ほどで進め、昼間は普通の業務をして、午後5時から合併に向けたさまざまな調査などに取り組みました。地崎側は外資系の大手コンサルタント会社が担当していたけれど、こちらは社長の私を含む少人数で夜を徹してやっていたのです。

晴れて迎えた合併式で、私は地崎から来た社員全員と握手したのですが、「今まで社長の顔をこんなに近くで見たことがない」と大変喜ばれました。私はとにかく最初からみんな仲良くなければならないと思い、「これは合併というより融合だ」と捉えていました。

もともと創業者の徳治が掲げた社訓は「総親和」です。これは会社、地域、社会の全体が良くなることを目指すことで、そのためには社員全員が力を合わせていかなければならない。まずは社内の融合から始めていかなければ

ばと思ったのです。

北海道経済界のリーダーとしても大変ご多忙のなか、シーニックバイウエイ北海道推進協議会の会長を務められ、今年で10年めです。振り返ってどんな印象をお持ちでしょうか。

実は、会長になる前から、私の前任で初代会長である高向巖さん(2004~16年会長在任)から「シーニックバイウエイ北海道は素晴らしい」とずいぶん吹き込まれていました。高向さんは本当にシーニックバイウエイが大好きでした。

実際、着任してみて理由がよくわかりました。各地のルートにかかわっている方々をはじめアドバイザーの先生方など、集まりで接する人たちの雰囲気、エネルギー、和気あいあいとしている。分野や所属などに関係なく、みな同じ方向を向いて地域づくりに前向きにかかわっていることが伝わってきて、本当に素晴らしいと思いました。

私は札幌青年会議所の理事長を務めた経験もあり、JCの活動を通じて多少とも地域づくりにかかわってきたのですが、シーニックバイウエイはまさに地域に密着した先端的な取り組みだと思いました。それは北海道開発局の担当課やdecさんという事務局運営する側の手腕が優れていることもあると思います。

振り返っても楽しい思い出ばかりですが、年1回、関係者が一堂に会する「全道ルート交流会議」後の打ち上げは格別でした。私も大いに歌わせて



全道ルート交流会議の交流会で歌を披露(2023年10月)

もらいました(笑)。

それと、これは思いがけないことだったのですが、まだ会長になって間もないころに静岡にプライベートでゴルフに出かけたときのこと、宿泊先の日本平ホテルに入ると、シーニックバイウエイ北海道のパネルがズラリと展示されていました。それは日本風景街道の静岡の団体と十勝シーニックバイウエイとの交流事業に関連した企画ということでしたが、道外にゴルフに出かけた先でシーニックバイウエイ北海道の風景に迎えられるとは思わなかったのも、大いに驚きました。そして嬉しかったですね。

今年6月に開催された「シーニックバイウエイ北海道20周年記念フォーラム」では、本場米国の「コロラドシーニック&ヒストリックバイウエイズ・コミッション」とわれわれシーニックバイウエイ北海道推進協議会が連携を深める基本合意書が締結され、これも嬉しいことでした。私も機会があれば、ぜひコロラドの活動ぶりを見に出かけたいところです。

(一社)北海道建設業協会の会長を務めるなど道内建設業界のリーダーというお立場です。北海道の現状をどう見ておられるでしょう。

北海道には今、大きなチャンスが訪れていると感じています。食や観光をベースにした生産空間としてのポテンシャルはもちろん、ラピダスの進出、GX金融資産運用特区の指定など、従来にはなかった可能性も広がってきています。その展開のために道路網などインフラの役割はますます重要になってきています。われわれ建設業界はそこに携わっているのですから、一層、努力して貢献していきたいと思っています。

ただ、どの業界でもそうですが、人手不足は深刻で、DXなどで生産性向上を図っていくとしても厳しい部分があります。そこはある程度、外国の人材に頼らざるを得ない部分があるの



締結式の様子

ではないでしょうか。そこにもさまざまな問題があることは承知していますが、積極的に問題を解決していく姿勢を大事にしたいですね。

まだ具体的な取り組みをしているわけではありませんが、例えば、外国人の就労者のために日本語や生活習慣、専門技術を教えるしくみや施設などを整えることも業界団体の役割の一つではないかと考えています。また、日本で働き、技能を磨いた外国人にはいずれ自分の国に戻って仕事をしたいという人もいます。そういう場合の受け皿をつくるべく、外国企業と事業提携したり、海外に会社をつくったりするなどの取り組みも考えられるかもしれません。

DX推進については講習会など人材育成の取り組みが懸命に進められています。しかし、これも一筋縄ではいかないところがあります。例えば、BIM(ビルディング・インフォメーション・モデリング: 3次元のデジタルモデルで建築物の設計、施工、維持管理を管理する手法)の導入が急がれていますが、土木では普及してきたものの、建築物については施工中に活用するためのWiFi環境を整えるのが難しいなど通信の

問題などがあります。また、土木では進んできたITによる機械化も細かい技術を要する建築では、やはり通信の問題などで成果が上がりにくいという悩みがある。今後はこうした問題を解決していく取り組みが重要だと考えています。

最後に、これからの北海道の可能性について最近、お感じになっていることを。

全国的に夏の暑さが厳しくなり、北海道の夏の気温も上がってきているものの、やはり冷涼さは北海道の大きな強みです。最近、面白いと着目したのが釧路商工会議所の取り組みです。

釧路市は以前から「クーラーのいらないまち」ということで、道外からの長期滞在者や移住者の誘致に力を入れています。釧路商工会議所が最近、制作した「Cool Stay 釧路」という動画が面白い。シティポップ風のオリジナル曲をつくり、カラオケ動画仕立てで親しみやすくユーモラスに釧路の涼しさをPRしています。これは道外の人たちの関心を集めやすく、発信力があると思います。こういう人を楽ませるセンスも地域づくりには必要なのではないでしょうか。

※「Cool Stay 釧路」は釧路商工会議所が設立100周年事業で2025年5月に制作。同会議所のサイトで公開されている。



Cool Stay 釧路▶



Scenic Byway Hokkaido 20th Anniversary Forum

GOOD DESIGN AWARD 2024

シーニックバイウェイ北海道 20周年記念フォーラム

～ Create a “Scenic Byway Culture” ～



「姉妹バイウェイとして末長くパートナーシップが続くことを願っています」とにこやかにスピーチしたのは米国コロラド州「コロラドシーニック&ヒストリックバイウェイ・コミッション」のタリア・シーエンズ副委員長。標記フォーラムで行われた連携基本合意書の締結式でシーニックバイウェイ北海道(以下、シーニック)はいよいよ国際的な連携の一步を踏み出しました。各地から集結した関係者で会場は終始なごやかなムード。20年の歩みを踏まえ新たなカルチャー創造に向かって活発な議論が交わされました。

[2025年6月16日／生活支援型文化施設コンカリーニョ(札幌)／主催：シーニックバイウェイ北海道推進協議会]

20年の歩みを辿り、明日の北海道を共に創る

- プログラム**
- ▶～これまでの足跡に寄せて～「シーニックバイウェイ北海道 20年の歩み」
坂場 武彦[シーニックバイウェイ北海道推進協議会 副会長、国土交通省 北海道開発局長]
 - ▶コロラドシーニック&ヒストリックバイウェイ・コミッション×
シーニックバイウェイ北海道推進協議会との連携に関する基本合意書締結式
 - ▶リレートーク 第1部 「地域とともに築いた、ソフトのインフラストラクチャー」
 - ▶リレートーク 第2部 「ソフトのインフラストラクチャーが育む新たなシーニックバイウェイ・カルチャー」
 - ▶～記念フォーラムに寄せて～「20年の想い出と記念フォーラムの総括」
石田 東生[シーニックバイウェイ北海道アドバイザー会議 委員長、筑波大学名誉教授]



締結式の様子

◆開会あいさつ

岩田 圭剛(シーニックバイウェイ北海道推進協議会 会長、(一社)北海道商工会議所連合会 会長)

全道約500に及ぶ団体によって取り組まれているシーニックの原点はまさに「地域主体」です。制度創設20周年の節目に開かれた本フォーラムが新たな連携のきっかけとなり、シーニックが今後も地域の誇りと未来をつなぐ架け橋として発展することを願っています。



◆これまでの足跡に寄せて

シーニックバイウェイ北海道 20年の歩み

坂場 武彦(シーニックバイウェイ北海道推進協議会 副会長、国土交通省 北海道開発局長)

シーニックは本場米国に学び北海道での適用を模索した「あたため期」(2001～02年)、2つのルートで実証的に検討した「モデルルート検討期」(03～04年)を経て05年に制度として開始されました。以来、地域と行政、企業が連携するしくみづくりや活動展開のための多様な試みが重ねられ、昨年には「グッドデザイン賞」を受賞しました。20年で培われたのは①観光を主とした企業との連携、②ルートコーディネーターや各地の開発建設部担当者の地域密着の取り組み、③全道約500団体の地域への愛着に基づいた活動、であり、大きな財産だと思っています。あらためて感謝を申し上げます。



◆記念フォーラムに寄せて

20年の想い出と記念フォーラムの総括

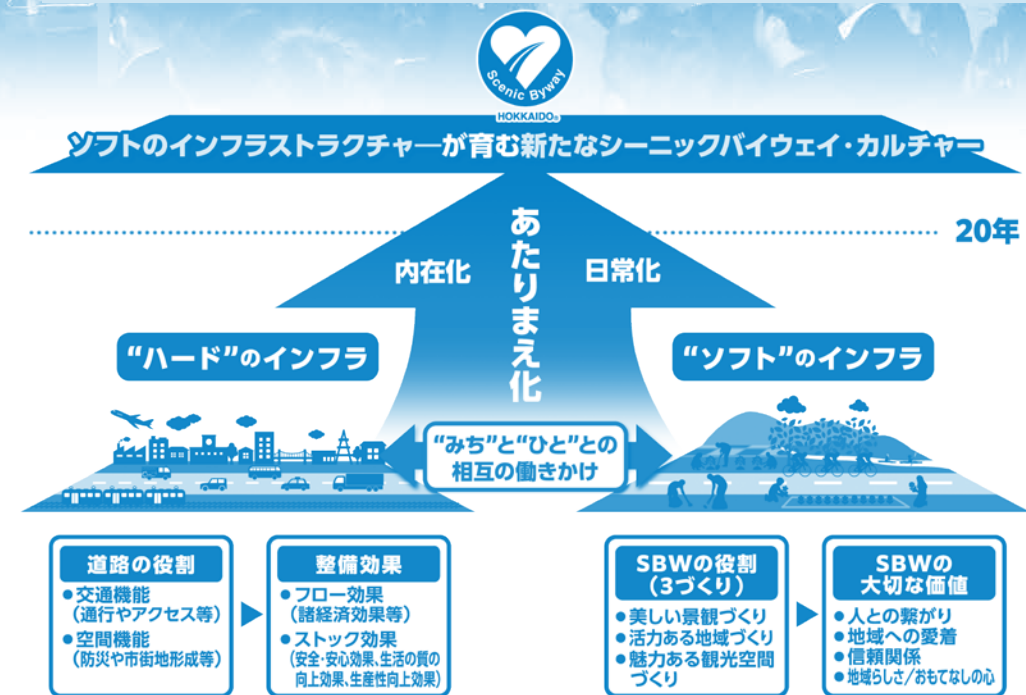
石田 東生(シーニックバイウェイ北海道アドバイザー会議 委員長、筑波大学名誉教授)

本日配布のプログラムにある趣意文はシーニックの基本哲学が明確に記されていて素晴らしい。地域のために意欲ある人が垣根を超えて仲間になり、共通の目的や価値に向けて協働することを20年前から提唱、実践してきたことは誇るべきことで、その効果は「ソーシャルキャピタル」の蓄積として調査でも実証されています。

人口減少に悩み、所得格差で東京に人が集中する日本ですが、基礎支出など加味すれば、東京都は決して優位ではない。地域の実力を見直し、「人が居てこそそのコミュニティ」として地域の思いを共有する仲間を増やすことが大事です。近年、国もグリーンインフラ政策などシーニックの考え方を後追いするような地域政策を推進し始めています。今後、北海道の状況は一層厳しくなるが、「気が付いた者の責任」を一緒に果たすべく力を合わせていきたい。「わっしょい」は楽しく「和を共に背負う」の意。これがシーニックの精神だと思っています。



★ファシリテーター：橋本 幸[dec理事長、北海道大学 客員教授] ★パネリスト：古谷 和之[NPO法人WAOニセコ羊蹄再発見の会 理事長]、高野 伸栄[シーニックバイウェイ北海道アドバイザー会議 委員、北海道大学 工学部 土木工学部門 先端社会システム分野 教授]、和泉 晶裕[(一社)シーニックバイウェイ支援センター 代表理事]、藤井 美智子[dec、ルートコーディネーター]



橋本ファシリテーターから提示された「ソフト・インフラストラクチャー」と「シーニックバイウェイ・カルチャー」の概念図

道路、港湾などのハードのインフラに対して、シーニックバイウェイ北海道はそれらの機能をさらに発揮させる「ソフトのインフラ」。その取り組みは20年を経て道内に広がり、今や地域の「当たり前」になりつつある…。このような捉え方を起点に、第1部ではシーニックはこれまでどのように根付き、何を育んだのか、第2部は地域への定着の先に育まれる今後の「シーニックバイウェイ・カルチャー」のあり方について語り合われました。

地域の思い、自発性を大切に。深まった行政との連携

橋本：第1部のパネリスト4名はシーニックの歴史の初期から携わってきた、いわば「20年選手」。シーニックにどのようにかわり、何を支えてこられたのでしょうか。

和泉：国交省北海道局の重点施策として検討し始めた2001年ごろの道路行政は、高速道路という流れ空間から道の駅のようなたまり空間に政策の視点が変わりつつある時期でした。一方、「北海道の高速道路など無駄だ」というさまじい公共事業批

判が巻き起こった時期で、単なる費用便益比では測れない、海外観光客からも評価されるような施策を模索していたのです。米国視察で印象づけられたのは地域の人が自発的に取り組むことが制度の肝ということ。この20年、活動と連携のウイングはどんどんひろがった。携わった方々のアイデアがシーニックの肥料になっていると思います。

古谷：支笏洞爺ニセコルートは3つのエリアで形成され、「世界の後志」を目指してきました。国、道、市町村、民間がコラボしたらこれ以上強いものはないと思い、協力し合ってきましたが、行政の人の話がわかりにくく議論を交わしたことも。地域のホスピタリティを大事に、ごみ拾いなどやれるところから始めたことや活動に賛同、理解できる人がそれぞれの個性を生かし、自由に取り組んできたことが今日につながったと思います。

藤井：2005年の入社以来ルートコーディネーターを務めてきました。最初に和泉さんたちから言われたのは①地域では決して「ノー」と言わない(困ったら持ち帰って相談)、②オーダーメイドの地域対応(地域で求め

られる将来像に向けて自分自身で考えて対応)、③予算はゼロ(お金をつくるところから地域と一緒に考える)。地域や行政のそれぞれの思いのタネを大切に、互いに理解し合える方向を探ることを心がけてやってきました。

高野：2001年の「あたため期」から携わってきました。最もシーニックによって大きく変わったのは北海道開発局職員だと感じています。道路管理などの従来の職務の他にシーニックのイベントなどでさまざまな役割を担って地域との交流を深め、住民にほめられるような経験や関係ができました。各地の開発建設部では部長以下、きめ細やかに住民対応ができるようになっており、地域拠点の強みも生かしている。職務規定なども職員がシーニックに取り組みやすい土壌が整ってきて、開発局職員のパフォーマンスを変えたと思います。

広がったネットワーク。より柔軟に、包容力ある制度へ



リレートーク 第1部

地域とともに築いた、ソフトのインフラストラクチャー

リレートーク 第1部 つづき

橋本:では、地域の「当たり前」としてさらにシーニックを育てていくためには何が求められるのか、また、期待することは。

高野:数年前に学生の卒論でシーニックに関する地域住民対象の調査を行いました。それで明らかになったのは、活動を通じて行政と多様なネットワークができ、活動団体同士も一つの目標に向けてつながったというネットワーク効果の大きさでした。今後、地域はいろいろな省庁の施策をミックスし、うまく補助金など活用して活動展開することを考えたい。サポーターである北海道開発局職員を通じて他の省庁にもアプローチし、小さなタネから大きな花を咲かせられたらと思います。

藤井:「秀逸な道」ができて「ここにまず行ってください」とシーニックを説明しやすくなったのが嬉しいですね。カフェやデッキなどシーニックとの接

点を増やし、それが地域の「当たり前」になる取り組みを進めていきます。今、担当している空知シーニックバイウェイは指定されたばかり。エリア24自治体のうち、まずは2、3自治体の交流から、とバスで地域資源を案内し合うキャラバンを始めています。地域や行政の思いのタネを大事にしましたが、今後はそのタネを蒔くようになっていきたい。

古谷:みんな高齢になるなかでどこまで継続できるかが問題。若い世代は、今は何もしなくても背中を見てくれていると信じています。活動当初はエリアの活動団体間で競争もあったけれど、シーニックキャンドルの活動などを通じて連携の良さを発見しました。今後は地域の多様なボランティア団体と柔軟に連携していけばいい。いろんなことが「当たり前」になるよう、これからも頑張っていきます。

和泉:地域が元気でなければ景観改

善や地域づくりはできない。だから地域にお金が落ちて稼げるしくみづくりを進める必要があります。これまでシーニックでお金持ちになった人はいないと思うけど、これからは遠慮せず稼げるしくみを考えて、と言いたいですね。また、活動のコアにシーニックがあれば、外側はさまざまな主体やジャンルとの連携があっていい。シーニックをアンブレラ(傘)のような包容力ある施策に進展させてほしい。

橋本:第1部の進行で私に課せられたもう一つの役割は「人へのフォーカス」です。各ルートの地域の関係者やアドバイザーなどシーニックに携わる人の肉声をまとめたいと、私の自作自演の応援歌「街道唱歌」をバックに約300人を約15分に詰め込んで「人の熱量カタログ」のような映像を作成しました。これを見ていただきながら、互いにシーニックの足跡や苦勞に敬意を表し合っ



て、第1部を終えたいと思います。私に「空知シーニックバイウェイと一緒にやって思いを表現しよう」と声がかかりました。以来、代表の方のリードもあり、思いの表現が実践できています。参加して気づいたのは、まちの景色の見え方ががらっと変わる。シーニックの価値は、携わる人の地域に対する思いを変え、その思いを実際に表現できることだと思います。

山岸:パブリック・リレーションズを専門とするPRプランナーで、2023年からアドバイザーをしています。今日のお話や動画に触れると、シーニック自体が壮大なPRプロジェクトであり、北海道開発局や道路を起点にして地域の人たちがかわる優れたパブリック・リレーションズだと感じます。また、シーニックは日々、身近にある道路などを愛で続けるという地域愛を育む運動と考えたと私のなかではしっくりきます。

橋本:静岡市出身で帯広の大学を卒業後、decに就職して7年目です。入社当時から先輩のルートコーディネーターのサポートをし、22年に日高シーニックバイウェイのルートコーディネーターになりました。まだ数年の経験なので、大きなことは言えないですが、自分なりに取り組んでいきます。

宮崎:10年前に北海道に転勤し、その後、道路調査官として推進協議会事務局を担当。制度検討委員会の立ち上げにも携わりました。この10年でシーニックが地域の人にとって地域づくりの入口として機能し、大きくな

りて機能していると思います。これは新しい課題が生じたときも機能すると思うし、そこにシーニックにかかわる価値があると確信しています。

地域にしかないものを愛でる、磨く。共創を次世代につなぐ

羽鳥:では、「みんなで育むシーニックバイウェイ・カルチャーの未来」ということで、今後に向けた期待や抱負をお聞かせください。

宮崎:シーニックの価値観や方法論は暗黙知として大切にされ、それがまさにシーニック・カルチャーです。道路管理者の立場としては道路という舞台装置の整備管理をしっかり果たしたい。開発局職員としては、シーニックは地域とのかかわりの入口であり、難点と思われがちな人事異動も多様な人材、世代が全道各地に送り出され、新たな目線で取り組むという意味で期待したいと思います。さらに制度を考える推進協議会事務局の立場としては、シーニックが官民の垣根を超えた共創を体現するものであり、その関係性を文化としてつなぎ広げられるよう努めたい。新しい知見を取り入れながらステークホルダー全体を見渡し、シーニックが進化できるような制度のデザインに挑戦していきたいと思います。

橋本:先輩ルートコーディネーターのノウハウを学び、地域の思いをくみとる力を養っていききたい。コーディネーター間で話し合う機会はあまりなかったですが、今後、先輩方から吸収しつつ自分らしいルートコーディネーター像

を追求し、地域に還元していきます。

山岸:これまでの20年間でシーニックにおける地域の愛で方はたくさん蓄積されているので、それら事例を分類分けするとよいのでは。制度でなく、マインドの面で地域とのかかわり方が整理されて活動がわかりやすくなると思います。また、次世代に渡すということでは、事例をしっかりと書きとめて書籍にするという方法もあると思います。

山崎:次世代への渡し方ですが、急に渡されても若い人たちは困るでしょう。創設者たち先輩方が持っている勢いや力、後ろ盾はまだ必要です。シーニックで地域の価値を変えようとするなら、地域の人の行動変容を促すことが重要。私のワインもそうですが、その地域にしかないものに着目し、道路などの構造物も含めてその価値を磨いていけばいい。頼もしい後ろ盾を得てどんどん挑戦し、シーニックの活動を推進していきたい。

羽鳥:まさにヴァナキュラー(土着性)がシーニックの価値であり、地域に押し寄せるグローバル化の波に対抗できるものではないかと思います。さまざまな意見が出たが、共通点は人と人とのかわりあい

ソフトのインフラストラクチャーが育む新たなシーニックバイウェイ・カルチャー

リレートーク 第2部

★ファシリテーター:羽鳥 剛史[シーニックバイウェイ北海道アドバイザー会議 委員、愛媛大学 社会共創学部 環境デザイン学科 教授] ★パネリスト:山崎 太地(有)山崎 ワイナリー 代表取締役、山岸 奈津子[シーニックバイウェイ北海道アドバイザー会議 委員、(一社)SHIRAOI PROJECTS 代表理事]、宮崎 貴雄[国土交通省 北海道開発局 建設部 道路計画課]、橋本 澤奈[dec、ルートコーディネーター]

人とのつながり、地域愛。シーニックが地域の価値を変える

羽鳥:第2部より若い世代の4名の方に新たなシーニック・カルチャーを育む上で思うところを話していただきます。シーニックをカルチャーとして見る際に想起するのは100年前、柳宗悦が始めた「民藝運動」です。彼はふだん文化芸術を生み出す主体とはみなされていない人の日常的な手仕事に新たな価値を見出しました。また、「ヴァナキュラー(vernacular: 土着の)」という言葉も挙げたい。「ヴァナキュラー・アート」は「非公式性、非専門性、独学性、自発性、非市場性、物語性、転用性」が特徴で、シーニックがカルチャーと

して広がってきた所以はそこにあると思います。例えば、空知シーニックバイウェイが指定ルートとしてスタートした際、「はじめまして私は『空知シーニックバイウェイ』です。」という印象的な表明で

はじまったプレゼンテーションから、道というインフラに地域の人の生きざまが埋め込まれていることを改めて感じ入りました。

シーニックを文化として見ることは、地域の生活者が道とかわりあう日常的・創造的実践や、そこに宿る生きる力や文化的エネルギーに価値を見出し、共感、鼓舞すること。私はそれを「シーニックの民俗的転回」と捉えています。

山崎:三笠市でワインづくりに従事し、「こんなことして地域の何になるのだろう」と悶々としていた

